

藤

並の森

Vol.44



▲桂浜にある大町桂月の碑

リレー随筆

土佐についてわたしが語れる

にしざわ やす ひこ
西澤保彦

一九九五年に職業作家としてデビューして十四年目。

今年、二〇〇九年一月に刊行したSFホラー短編集『マリオネット・エンジン』(講談社ノベルス)をもつて

著作は四十八冊目を数えた。夏頃に中央公論新社からノンシリーズ・ミステリ短編集を、そして幻冬舎から長編書き下ろしミステリを刊行する予定で、順調に進めば、年内に節目の五十冊を達成できそうな見通しである。

作品数も増えたが、十四年もやっていると小説以外の仕事の依頼もけつこう来るようになる。他の作家さんの文庫本につける解説やエッセイ、そういう雑文の類いだ。もちろん編集サイドも闇雲に依頼してくれるわけではなく、相手を選んでいる。わたし如きが都筑道夫先生の本に一度も解説を書かせていただけたのは、それ以前に先生のファンであることをあちこちで公言していたお蔭だ。

珍しいところでは、ジェンダー論をテーマにした小説を書いたせいだろう。三鷹市発行の女性の人権を考えるための情報誌にエッセイを寄せて欲しいと頼まれ、書いたこともある。常日頃からそういうアンテナを張っていたところへ、わたしの著作がひつかかってたという経緯なのだろう(そのエッセイをお読みになつた

方から三鷹市を通じて、講演をして欲しいという依頼が来たが、さすがにこれは丁重にお断りさせていただいた)。

かようには雑文の依頼は、編集サイドの「このひとならなにか書ける」という思惑に基づいて為されるわけだ。が、この思惑がいつも目的を射ているとは限らない。わたしにとって依頼される雑文のテーマでいちばん困るのは、ずばり「地元、高知について」である。なにしろ高知県出身、おまけに現在に至るまで高知市在住、高知のことならば語っても語り尽くせない思いの丈が、西澤さんにはきっとおありでしょう——というわけなのかどうかは知らないが、まあともかく、なにか書けるだらうと期待されるのであります。が——と、ここで口調が急に泣き言めいでまいります。

地元でありながらわたし、高知のこと、なんにも知らないのです。なにしろ観光客に桂浜への順路を訊かれてしどろもどろ、答えられなかつたほどだと言えば、どれほど無知かは一目瞭然であります。今回、土佐についてというお題をいただいて、うーん、うーんと呻吟するばかり。で、なんとかでつち上げたのがこれ。すみませんすみません。
(作家)

会
見
展
紹
介

土佐のお話めぐり 「おどけ者・妖怪大集合」



平成21年
3月1日(日)
▼
4月5日(日)
企画展示室
観覧料350円



▲ 展覧会入り口の様子

高知県立文学館では、この春、郷土に残る民話をご紹介する展覧会を開催しています。

● 土佐民話の魅力を楽しく紹介！

親から子へ、子から孫へと語り伝えられてきた民話は、テレビやラジオのなかつた時代、想像力をかきたてる素晴らしい娯楽であり、また同時に、生きるための知恵や自然とのつ

きあい方を学べる大事な教材でもあります。

した。

県民性や地域によって様々な特色があ

り、南国風土あふれる温暖な気候の土佐では、畠仕事の合間に立ち話をするような明るい小話が多く生まれました。開炉

裏ばたを囲んで冬の夜長にじっくりと語る雪国とは違い、架空の昔話よりも実際にあったという伝説や世間話に材をとり、テンポ良く語り聽かせることが多いのが特徴です。このような土佐には「ひょうげ」「いびつそう」など「おどけ者」たちの愉快な笑い話や民話、「シバテン」や「エンコウ」といった「妖怪」たちの伝承が数多く残っています。

民話は、「民間説話」を短くした言い方で、私たちの生活のなかから生まれ、口伝えで伝えられた昔話・伝説・世間話の総称といわれています。もともと口から耳へと伝えられてきた民話は、文字が生まれる前からあつたともいわれており、文字で残っている資料では奈良時代に書かれた『日本書紀』や『万葉集』に『浦島太郎』の原型を見ることができます。このような民話の歴史や土佐民話の特色もご紹介しています。

● 民話ってなあに？

民話は、「民間説話」を短くした言い方で、私たちの生活のなかから生まれ、口伝えで伝えられた昔話・伝説・世間話の総称といわれています。もともと口から耳へと伝えられてきた民話は、文字が生まれる前からあつたともいわれており、文字で残っている資料では奈良時代に書かれた『日本書紀』や『万葉集』に『浦島太郎』の原型を見ることができます。このような民話の歴史や土佐民話の特

色もご紹介しています。

● 土佐のおどけ者

本展では、このような民話を大事な郷土の「口伝えの文学」ととらえ、子どもたちに民話を知つてもらい、興味を持つてもらうことを目的として県内各地に残る様々な民話や伝承をパネルや紙芝居などで楽しくご紹介しています。

土佐民話の特色のひとつは、本当にあつたとされる伝説や世間話、笑い話が多く残っていることです。今回の展覧会では「ひよ

うげ」や「いびつそう」など土佐の笑い話の主人公であるおどけ者を、中村に実在した土佐一番のおどけ者・ひょうげの泰作さんの直筆文書や、日高村の忍者茂平が修行したといわれる猿田洞の探検図などの資料や書籍、パネルでご紹介しています。また、各地に伝わるおどけ者たちの笑い話をパネルでご紹介していますので、その土地ならではの方言、お話をお楽しみいただけます。



鹿持雅澄展

「あがはりみちに くさなおほしそく」
1月2日(金)から2月22日(日)まで開催した「鹿持雅澄展」
「あがはりみちにくさなおほしそく」は、好評のうちに
終了いたしました。展覧会では、雅澄の書や愛用品など
約一六〇点にのぼる関係資料を紹介するとともに、様々な
関連企画を行いました。

◆万葉の世界に触れる

雅澄が人生の大半を費やし、
研究に没頭した万葉集。その
世界に触れていただこうと、
記念講演会(1月11日)、「万
葉の調べ」(1月11日・1月
15日)を開催いたしました。

講演会の講師は、松山市立
子規記念博物館長・竹田美喜

氏。万葉人の禁じられた恋に
ついて、史実を交えながら、
わかりやすく情熱的にご講義
くださいました。

一方、「万葉の調べ」は雅樂
体験と鑑賞会の二本立て。体
験イベントでは、親子で笙や

鞨鼓などの演奏に挑戦、
蘭陵王



▲ 雅樂体験(蘭陵王)の様子

王も登場しました。鑑賞会は
管絃・舞楽の他、伎楽の演奏
もありました。

繁藤雅陽会による詳しく述べ
解説で、会場内に笑顔が溢れてい
ました。

◆雅澄作歌を味わう

雅澄は研究とともに、数多くの
歌を詠んでいます。カルチャーサ
ポーターによる朗読会(1月17日)
と元景仰会有志による朗詠会(1月
25日)は、万葉歌だけでなく、雅澄
作歌を味わう特別な機会となりま
した。

また、「いにしえの香」(1月1日)
のテーマも雅澄作「袖貞歌」。これ
をもとに作られた盤物(江戸時代
に広まつたとされるゲーム的要素
の加わった香遊び)を、藤本淑峰氏
の解説とともに楽しんでいただきま
した。



▲ いにしえの香の様子

(学芸課／森香奈子)

一方、「万葉の調べ」は雅樂
体験と鑑賞会の二本立て。体
験イベントでは、親子で笙や

鞨鼓などの演奏に挑戦、
蘭陵王

くださいました。

それからこの「天璋院篤姫」では、昨年幸運な出会いがあり、院展作家の小市美智子さんから新聞連載の挿絵

三五二枚の原画を、一点欠かさず寄贈していただきました。今年の早い機会に、できれば一堂に展示紹介していくこ

「菊池寛賞」

溝瀬 良一

昨日の話題になりますが、宮尾登美子さんが文藝春秋社主催の「菊池寛賞」を受賞され、十一月五日に東京でその授賞式がありました。宮尾先生といえば昨年は何といつても大河ドラマ「篤姫」と、先生には珍しい男性を主人公にした「錦」の出版という大きな話題が重なった年でした。受賞祝賀の会場にはたくさんの方々が見えられ、尾崎知事も来られていましたが、二千人を超す盛況で、会場はごった返すようなくぎやかさでした。宮尾先生にあいさつに来られる来場者が引きも切らず、なかなか面会の機会がうかがえず、改めてその交遊の広さを感じました。式典での宮尾先生のスピーチでは、「心身共に落ち込んでいたが、この賞を機に」と意欲を述べられていて、元気を取り戻して、ぜひ新しい構想をひらいていただきたいものだと思います。

さて、大河ドラマの「天璋院篤姫」は、極めて高い視聴率を維持したまま完結しましたし、文学展覧会の方もどこも盛況でした。一昨年の暮れに鹿児島での開催を皮切りに、年が明け高知、姫路、銀座の高島屋、世田谷、北海道と、まさに全国を股に掛けて巡回し、いずれも非常に多い観覧を得たところです。宮尾先生の着眼のすばらしさといふか、貴く信条に多くの共感を得ているからこそこのことだと思います。

それからこの「天璋院篤姫」では、昨年幸運な出会いがあり、院展作家の小市美智子さんから新聞連載の挿絵三五二枚の原画を、一点欠かさず寄贈していただきました。今年の早い機会に、できれば一堂に展示紹介していくことを期待しています。どうぞ期待を。

心いやすふるやとの川——島崎曙海の山田堰——猪野 瞳

ふるさとの川は疲れた心を抱きこみ、人をたちなおさせていく力をもつものであろうか。島崎

曙海が中国東北「満州」から引揚げてきたのは、敗戦から二年ほどたつてだった。物部川の山田堰の近くの談議所が二年ぶりのふるさとだった。満鉄社員として渡満、そこで詩誌「一〇三高地」や「満州詩人」の中心となつた。野性的な詩で「満州のバルザック」とも言われた。

戦時下は宣撫班員として中国戦線へも行き戦争詩もかいた。ビルマへも派遣された。帰つてきたとき、それで傷ついてもいた。帰るとまもなくガリ刷り同人誌「蘇鉄」をだし、岡本彌太詩碑建設委員会の委員長となつて、岡本彌太生家のある岸本海岸近くに、高村光太郎揮毫の「白牡丹圖」を刻みこんだ詩碑を建てた。行動の人だつた。談議所の家の近くには野中兼山構築の山田堰

▲かつての山田堰

をつづいて「夕方になると、近くの川へ生活の垢をおとしにゆく一枚一枚ぬいで真裸になる小魚がつつきにくる。どこかで犬が吠えている犬と一緒に僕の好きな女が川に入つてくる。僕には無関心に、犬を川になげこみ、自分も真裸で川にひたる。女の来ない夕方はなんとなく淋しい」ともかいた。まだ川が暮らしと結びついて汗と疲れた心を洗い、いやす場だつた。「もっと住みよい日本だろうと思つて帰つてきたが」ともあつた。

戦後の荒廃の日常のなかで、戦時下の心の傷を洗い勇気づけ、力を添えてくれるふるさとの川でもあつたろう。いまは上流に三つもダムができる。風景はない。そういうえば「四万十川」「仁淀川」「鏡川」のように川名を冠した小説が物部川にはない。

(詩人)



があり、物部川の水が香長平野、高知平野をうるおしてきた。物部川の広いところをななめに堰いて広い水面をつくり、奥から流してくる木材を筏に組み替え、舟入川へ入れ高知へ戦後復興資材として送つていた。

深く澄んで青磧が底に見え、魚影がちらつき、夏は子供たちが群れあそんだ。近くの県道の橋上から飛び込むのが一人前になる通過儀礼にもなつっていた。

帰つてきて島崎曙海は「自分のために」という長篇詩をかいた。そこには「中国人の生活のたしかさ インドネシア人の肌の黒光り マレー人の真実 僕は南洋の土人」といつては、彼等をケイベツしてきたが「はずかしい」ともあった。つづいて「夕方になると、近くの川へ生活の垢をおとしにゆく一枚一枚ぬいで真裸になる小魚がつつきにくる。どこかで犬が吠えている犬と一緒に僕の好きな女が川に入つてくる。僕には無関心に、犬を川になげこみ、自分も真裸で川にひたる。女の来ない夕方はなんとなく淋しい」ともかいた。まだ川が暮らしと結びついて汗と疲れた心を洗い、いやす場だつた。「もっと住みよい日本だろうと思つて帰つてきたが」ともあつた。

戦後の荒廃の日常のなかで、戦時下の心の傷を洗い勇気づけ、力を添えてくれるふるさとの川でもあつたろう。いまは上流に三つもダムができる。風景はない。そういうえば「四万十川」「仁淀川」「鏡川」のように川名を冠した小説が物部川にはない。

資料受贈報告

——最近の寄贈資料から——

蟲になりても

田所妙子編著 文藝春秋発行 一八八頁
二〇〇六年六月 B6版

豊島未来「四國現代万葉集(一)

杉本恒星著 壱發行所「高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(四)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(五)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(六)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(七)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(八)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(九)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十一)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十二)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十三)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十四)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十五)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十六)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十七)

受贈報告(平成〇年十一月～平成二年一月) 敬称略

▼田所俊一「(復刻版)ある死刑囚の歌 蟲になりても

田所妙子編著 文藝春秋他 ▼佐竹玲子・青磧 佐竹

玲子著 高知アララギ短歌会 ▼松村五夫・南學讀本

中島鹿吉著 日新館書店 ▼市原麟一郎・すかたん

おかしい土佐民話落語 I 市原麟一郎著 高知新聞

社他 ▼梶田順子・歌集「サバンナの風」梶田順子著

ながらみ書房 ▼角川春樹事務所「人情屋横丁」山本

一力著 角川春樹事務所 ▼谷岡亜紀・闇市 谷岡

亜紀歌集 谷岡亜紀著 雁書館他 ▼井伏鱒二在所

の会「第15回」鱒二忌 井伏鱒二在所の会編 井伏

鱒二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(一)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(四)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(五)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(六)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(七)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(八)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(九)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十一)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十二)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十三)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十四)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十五)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十六)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十七)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十八)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(十九)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十一)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十二)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十三)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十四)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十五)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十六)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十七)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十八)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(二十九)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十一)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十二)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十三)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十四)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十五)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十六)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十七)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十八)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(三十九)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(四十)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓

のごとく 国見純生著 ながらみ書房他 ■井上孝夫・

鰐二在所の会」▼豊島未来「四國現代万葉集(四十一)

豊島未来編 現代短歌を考える会」▼高橋正・蜻蜓



イベント紹介

…… 最近開催された催事をご紹介します。……

1月21日(水)に鹿持雅澄文学散歩を行いました。定員30名の募集に対してキャンセル待ちもできるほどの人気でした。当日の天気は雨でしたが差し支えのない程度だったので、晴天・雨天両方の予定場所をすべてまわることができ、充実した内容になりました。

今回は雅澄の住んでいた高知市福井(邸跡・墓所)や妻きくの甥である武市半平太郎(瑞山神社)、そして雅澄が赴任していた県東部を訪ねながら歌碑をめぐりました。東部では芸西村の門脇さんや教育委員会、奈半利町の竹崎さんをはじめ浦の会のみなさんにご案内やあもてなしを受け、雅澄も見たであろう大海原や広がる砂浜のすばらしい景観と同様に地元の気さくであたたかい人のつながりを感じることができました。

(学芸課／門田貴美子)



▲文学散歩の様子



▶朗読ではプロジェクターや音楽を使用した多彩な演出もありました。

(下)多くのお客様でぎわつた島本須美さんの講演会の様子



在学期間：2009年3月19日～2009年7月23日
場所：高知市文化プラザ「かるぼーと」9階第3学習室
曜日：毎週木曜日 第1時間 午後6時～7時
第2時間 午後7時10分～8時10分
※3月19日は開講式と記念講演 午後6時～
募集人数：60名
申し込み：2月19日から月曜日を除き、午後0時半～6時まで、「かるぼーと」8階ロビーで随時受付中。
(詳細はTEL: 088-883-5061／文学学校受付までどうぞ)

朗読フェスティバルがますます多彩になりました！

2月21日(土)に開催された「朗読フェスティバル2009」には県内各地から22組45名の出演者のみなさんが集まり、多彩な作品をそれぞれが想いを込めて朗読してくださり、来場者の方からも「昨年よりも充実しているように思う」「出演者も聞く人も自由に参加ができる肩のこらないイベントで大変好ましい。朗読への関心が高い文学作品が広く読まれるきっかけになると思う」などのお言葉をいただきました。

また、フェスティバルの最後には特別ゲストとして高知県出身の声優・島本須美さんによる講演会「語り聴かせる相手はだあれ？」を開催しました。島本さんは、「朗読する時には、上手だ」と言っていたがためにテクニックに走りがちな人もいるけれど、本当に作品が伝えたることは何か、自分が感じたことは何か、などを作りすぎない自分自身の声で表現することが大事だと思う」とプロならではのアドバイスのほか「もっと方言を大事にしてほしい」などの内容を、実演をはじめてお話し下さいました。

また来年も出演者のみなさんと一緒に楽しみにいただけるイベントを目標しております。

ご期待ください！ (学芸課／福富陽子)

高知文学学校は、高知の文学土壤をたがやしたいとの思いから1957(昭和32)年に開校、以来、文学に触れたいと願う人々の学び舎として半世紀をこえる歩みを続けてきました。4ヶ月余りの短期間で、文学史、創作方法、鑑賞、批評などについて学ぶことができる講義のほか、ピクニックなどの楽しいレクリエーションもあります。文学に関心のある方、ぜひご参加ください。

文学学校第55期へどうぞ！

展
覽
會
紹
介

生誕一四〇年

大町桂月

～酒と旅と自然を愛した文人展への誘い。

高知県立文学館では4月11日(土)から5月5日(火・祝)まで「大町桂月～酒と旅と自然を愛した文人」展を開催いたします。

▲大町桂月



大町桂月（一八六九～一九二五）は、土佐郡北門筋八番屋敷（現高知市永国寺町）に生まれました。

本名は芳衛。土佐の月の名所桂浜

に因んでつけた桂月は号。酒と旅と自然を愛し、数多くの紀行文を残した高知出身の文人です。

桂月は、帝大在学中より能文家として、合著『美文・韻文 花紅葉』で美文の創始者として脚光を浴び、博文館では硬派の評論家として高山樗牛と並称され、後には、富山房の「学生」を主催し青少年の指導にも力を注いだ人物です。「文章は人格なり、己を欺くなれ」桂月の言葉です。その飄逸洒脱な人格は、彼が残した文章からも窺うことが出来ます。

また、旅を愛した桂月の文学碑は全国に八四基建立されていますが、その約半分は終焉の地である青森県

内の観光地にあります。

本展では、青森県蔦温泉や生誕の地である高知市、ゆかりの地である千葉原鹿野山、佐渡市、関東に住むご遺族や日本近代文学館などが所蔵している日記、原稿、創作資料、遺愛品などの中から、厳選した約200点を展示し、今年、生誕一四〇年を迎えた大町桂月の人と文学を顕彰します。

また、関連行事としては、田岡嶺雲の研究者として知られる西田勝氏と「評伝 大町桂月」を執筆された高橋正氏の対談、青森県内における桂月の文学碑の建立に尽力された青森中央学院大学客員教授の棟方健治氏の講演、桂月の文学碑を訪ねる文学散歩（県内、県外）、桂月や桂月ゆかりの人々の作品を読む朗読会、毎週土曜日には、担当学芸員による展示解説も行います。

是非、お越しください。

（学芸課／津田加須子）



▲蔦温泉内鉢杉前に建てられた和歌と紀行文の複合碑

企画展
案内**土佐のお話めぐり～おどけ者・妖怪大集合～**

平成21年 3月1日(日)～4月5日(日)まで 午前9時～午後5時 (入館は午後4時半まで)

◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室

◆観覧料／一般350円(常設展含む)

「ひょうげ」や「いごっそう」などのおどけ者たちや、「エンコウ」や「シバテン」といった妖怪たちの土佐に残る様々な民話や伝承を紙芝居やパネルなどでご紹介します。(※会期中休館日なし)

土佐のお話めぐり展のご案内をしています！詳細は2・3ページをご覧ください。

**「大町桂月～酒と旅と自然を愛した文人」展**

平成21年 4月11日(土)～5月5日(火・祝)まで 午前9時～午後5時 (入館は午後4時半まで)

◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室 ◆観覧料／一般400円(常設展含む)

酒と旅と自然を愛し、数多くの紀行文を残した高知出身の文人・大町桂月。

本展では、日記、原稿、創作資料、遺愛品などの中から厳選した約200点を展示し、生誕140年を迎えた大町桂月の人と文学を顕彰します。(※会期中休館日なし)

大町桂月展のご案内をしています！詳細は7ページをご覧ください。



▲大町桂月

■5月の企画展案内 瀬戸内寂聴の世界～生きることは愛すること～

一昨年文化勲章を受章した、瀬戸内寂聴さん。『源氏物語』関連資料や原稿、書簡、手作りの品々など、全国を巡回した貴重な資料をご本人から借用し、瀬戸内寂聴さんとの人と文学の軌跡を紹介、魅力に迫ります。

5月12日(火)には瀬戸内さんの講演会も予定しています。(会期：5月12日(火)～6月21日(日)まで)

イベント
案内**宮尾登美子さん講演会開催決定！**

平成21年4月19日(日) 午後2時～3時30分

高知県立文学館では、高知新聞社、NHK高知放送局、三翠園と共に
平成21年4月19日(日)午後2時～3時30分 RKCホールにて

「宮尾登美子 私の世界」と題しての宮尾登美子講演会を開催します。

今回は、宮尾登美子さんと元・別冊文藝春秋編集長の高橋一清さんとの
トークショー形式で行い、宮尾文学作品の魅力を探ります。

■入場無料(参加には整理券が必要です)■

参加の
お申込受付
3月16日～
開始します

※なお
不備

**好評のため、定員に達しました。
参加申込は受付終了しております。
ありがとうございました。**

**利用案内**

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

観覧料 一般350円

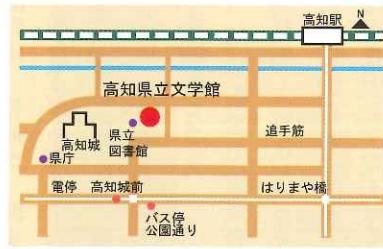
特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県
及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、
療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆
者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内

- 高知龍馬空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857